

【取扱い厳重注意】

平成23年8月3日

聴取結果書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局

局員 加藤 経将

平成23年8月3日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第1 被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

1 被聴取者

東電フュエル株式会社（元南明興産株式会社）

福島第一事業所 所長代理 秋元 和政

2 聴取日時

平成23年8月3日午後2時00分から同日午後4時17分まで

（休憩なし。）

3 聴取場所

内閣官房東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会

第1聴聞室

4 聴取者

参事官補佐 加藤 経将

主 査 千葉 哲

5 ICレコーダーによる録音の有無等

あり

なし

第2 聴取内容

事故時の状況とその対応について
別紙のとおり

第3 特記事項

なし

以上

【取扱い厳重注意】

別紙

【職歴等】

- 平成23年3月11日に地震・津波が発生した当時、南明興産株式会社の福島第一原発内の事業所で勤務していた。
事故発生後、同事業所から配置換えとなり、現在は東電フュエル株式会社（本年7月1日に社名変更）防災グループ預り・千葉防災センター駐在といった身分となっている。
- 南明興産については、東京電力から陸上防災業務の委託を受け、発電所敷地内における消防車の運用等の業務を行っており、福島第一原発の敷地内に所在する事務所において、所長以下11名が勤務している。所長と女性事務員の2名が日勤、その他9名はA班、B班、C班に分かれて当直勤務に従事しており、私はB班の責任者として勤務している。また、消防車については2台運用している。
- 毎日の仕事については、朝のミーティングから始まり、それが終わると消防車に乗車して、工事のために通行止めとなっている場所等注意を要する場所を確認する趣旨で構内全般の見回りを実施する。また、見回り中に火報があればそのまま出動することとなるため、見回りに出るに当たっては全員防火服を着装している。
午後からは所員の技術レベルの向上を図るため、ポンプ等の操法訓練を実施するなどし、終了後にミーティング、その後、事業所において火災等に備えて待機することとなる。
- 私は、千葉火力発電所から異動してきたが、東電の社員から「ここは火力と違って安全ですから。火事はありませんから。」と言われたり、「敷地内で何か起きたと思われるので、現場に急行する際でもサイレンを鳴らさないで欲しい。」等と指示されたこともある。危険と常に隣り合わせの火力発電所と比べて、原子力発電所は防火・防災への意識・関心が低いように感じていた。

【地震発生以降の状況】

- 平成23年3月11日は当直勤務明けであり、健康のため浪江町のアパートまで歩いて帰宅していたときに地震が発生した。
地震発生時は、海沿いの道を歩いていたが、携帯電話から聞いたことのない警告音が鳴り響いた後、大きく地面が揺れ始め、海面が激しく波打ち、道路の電柱が倒れたり、民家から悲鳴が上がり、人が飛び出してくるなど、これまでに経験したことのないほど大きな地震であることが分かった。
- すぐに「原発で火災が起きているかもしれない。会社に電話しなくては。」と思い、携帯電話で会社に電話したが、つながらなかったため、そのままアパートに帰り、普段通勤に使っている車で発電所内の事業所に駆けつけることにした。
- 車を取りに帰ってから事業所に到着するまで1時間くらいかかったため、会社に着いたのは16時頃だったと思う。会社に向かう道中、道路が歪み、家屋が壊れるなど、これまで見たことのない地震や津波による被害を目の当たりにした。

【取扱い嚴重注意】

当事業所は、発電所の正門を入れてすぐ左手にあるが、私が当事業所前に到着すると、所長と事務の女の子が建物の外に避難していた。

そして、所長から、無線機を持って免震重要棟に行くように指示され、免震重要棟に行った。

このとき、南明興産の関係者で免震重要棟に参集したのは、

所長、私、■■■■、■■■■の4名

に

当直勤務の■■■■、■■■■、■■■■

を加えた7名であった。

○ 南明興産は、発電所内で消防車2台の運転操作を担当していたが、1台については5・6号機の方で訓練を行っていた際に津波に襲われ、乗っていた者は消防車を置いて走って逃げてきたとのことであり、この時点において南明興産が動かせる消防車は、事業所の車庫にあった1台のみであった。

○ 免震重要棟は東京電力の社員や協力企業の社員でごったがえしており、私達は廊下で待機していたが、18時か19時ころに、所長が気を利かせて事務所から持ち出してきたビスケット等の非常食を出してきて、「秋元、ここじゃ食べらんねえから、車の中で交代で食べて来いよ。」と私達に非常食を渡してきた。

東電からは何も食料等はおらず、周りの協力企業の人達も何も食べていない様子だったので、所長が「じゃあ、事務所に少しだけ残して、あと全部こっちに持ってきて、みんなにも食べてもらおうや。」と言い、私が事務所に食料を取りに行き、周りに配った。

3月11日の夜はこういったことをやって過ぎたのを記憶している。

○ その後、日付が変わり、

3月12日2時から3時ころ

だったと思うが、所長から、図面を見せられながら、

1号機のタービン建屋にある送水口を確認し、そこから消防車で注水するように指示を受けた。

今となれば、原子炉の水位を確保するために外から水を送り込むために実施したということは分かるが、当時は、所長からも「ここに送水口があるから、1号機に水を入れてくれ。」といった程度の説明しか受けておらず、何のために水を入れるのかといったことは理解していなかった。

私は、地震発生前に日常の業務を通じて、そこに送水口があるのは分かっていたが、それが内部のどこにつながっているのかは理解しておらず、とにかく、

分かっている人が分かっていたらいい、自分たちは実働部隊であり、指示されたことをやればいい。

と思い現場に向かった。

【1号機への注水作業】

○ 免震重要棟から1号機タービン建屋への道路には陥没が見られたため、所長と東電

【取扱い嚴重注意】

の社員が乗ったライトバンが、私のほか当直の3名が乗った消防車を先導する形で、陥没部分を避けるため、蛇行運転しながら向かった。このとき、2号機と3号機の間にある西側PPゲートを通っていった記憶があるが、このゲートについては、私達が通ったときにはすでに開いていた。

- 1号機タービン建屋に到着したが、建屋のシャッター部分が津波の圧力で開口し、流された車が2、3台積み重なっている状況であり、送水口を探すのが困難であった。消防車のサーチライトを点灯して、その明かりを頼りに送水口を探したが、見つからなかった。送水口が見つからない旨を南明興産の無線機で免震重要棟に伝えたところ、一旦戻ってこいということになり、免震重要等に引き返した。このとき現場にいたのは10分から15分程度だったと思う。

- 免震重要棟に帰り、もう一度図面で送水口を探していると、東電の社員の誰かが、「俺、工事やったばかりだから場所分かるよ。」と言うので、私たちと一緒に現場まで行って探してもらうことになり、そのまま1号機のタービン建屋に戻ったところ、その人が「ここにあるよ。」と行ってすぐに見つけてくれた。

後になって考えると、本来はシャッターの脇にあるものが、津波の圧力で押し曲げられたシャッターの枠に隠されていて見つからなかったものと考えられる。

送水口が確認でき、「じゃあ、すぐに入れる。」ということになったが、注水に当たっては、

建屋から見て海側にある道路に停めた消防車
から

建屋の送水口

までホースを延ばす必要があり、ホースを通すルート上には津波で流された車などがあり、きちんとホースを通せるか心配だったが、やってみると、特に問題なくホースを延ばすことができた。

ホースは1本で足りたのか、2本で足りたのか覚えていないが、とにかく繋ぐ作業については、10分から15分程度で完了したように記憶している。

- 私達が乗ってきた消防車には1, 300リットルの水が積載してあったので、まずはそれを注水した後、すぐ近くに津波で使用不能となった消防車があったので、そのタンクに残っている水をくみ上げて、注水することとした。

故障した消防車のタンクは、私達の消防車から少しホースを延ばせば届くような近い位置にあったので、特に苦労もなくホースを繋ぎ、2,000リットルを注水した。

送水口の先がどこにつながっているかについて詳しい知識はなかったが、どれくらい水を送り込んだかを示す計器であるフロート式流量計を見ながら作業をしていたので、合わせて3,300リットルの水が建屋内に入ったことは間違いない。

- 注水作業については、ラインが構成され注水が始まったら現場を離れてもいいというものではなく、圧力計等の計器を見ながら、

圧力の急激な変化はないか

ポンプが正常に機能しているのか

といったことをしっかりと見ていなければならない。

【取扱い嚴重注意】

このため、注水作業中はずっと現場におり、結局、最初に現場で送水口を探し始めてから注水終了まで1時間くらいはかかったのではないかと思う。

- 注水作業終了後、来たときと同じようにライトバンと消防車の順番で免震重要棟に帰ったが、入口でサーベイされ、被爆しているということで隔離された。思ったよりも待たされている時間は長く、一緒にいた若い奴が「俺達、見捨てられてるんじゃないですかね。」と冗談を言うほどだった。

結局、待機時間は1時間から2時間くらいはあったのではないかと思う。

私達が待たされている間は、南明興産、原防でまだ被爆していない人たちが注水に行ったと聞いている。

- サーベイで着ていた服を下着まですべて捨てられてしまったので、この後どうしようかと思っていたが、東電の人が作業着を持ってきたので、下着も履かず直履きで作業着を着て、免震重要棟1階の南明興産が待機している場所に戻ったが、10分から15分程度で現場に出ていた南明興産の人間が戻ってきて、私も休んではいけないので、すぐに現場に復帰することとなった。

このとき、東電の自衛消防隊の人たちと一緒に、先導するバンと消防車に分乗して現場に行った。

- 私が1号機の現場に復帰したときには、1号機の手側にある防火水槽から真水をくみ上げ、1号機建屋内に注水する作業を行っていたが、私達が使っていた消防車に防火水槽から水を汲み上げる吸管が付いていないことに気付いた。

付近の北側PPゲート付近に故障して停まっていた消防車を見ると、吸管が付いたままとなっていたので、無線で免震重要棟に報告の上、それを代用することとした。

そして、私たちが乗ってきた消防車に吸管を取り付け、防火水槽から水を吸い上げ、この水を消防ホースで送水口から建屋内に継続的に送れるようにした。

- 一口に防火水槽から汲み上げるといっても、防火水槽の上には津波で流されたがれきなどが乗っており、これをどける作業もあったため、真水を使い切ってから海水を入れるという考えは理解できたものの、

何で真水に拘るんだ。すぐ近くに海があるんだから、海水を入れればいいじゃないか。

と思いながら作業に従事していた。

- このようにして防火水槽からの1号機への連続注水が開始されたが、東電の資料によれば、東電の社員が実際に注水作業に従事して防火水槽から注水を開始したのが

5時46分

となっている。

私は無我夢中で作業しており、詳細な時間は覚えていないが、

所長から1号機への注水の指示を受けたのが、2時から3時ころ

最初に消防車で注水作業をしたのが1時間程度

免震重要棟に戻り、サーベイを受け隔離されたのが1～2時間程度

南明興産の待機所にいた時間が10分から15分程度

であり、その他移動時間や防火水槽からのライン構成等に費やした時間を考えると、

【取扱い厳重注意】

東電の資料にある5時46分で矛盾はない
と思う。

- このようにして、防火水槽から1号機への連続注水が開始されたが、防火水槽の水が少なくなってくるので、どこかの防火水槽から補給しなければという話になった。そのような中、柏崎刈羽から応援の消防車が来て、2号機の裏手にある防火水槽から、現に注水に使っている防火水槽に水を補給する作業をしていた。
ただ、当時、このラインを作ることは認識していたが、会社のライトバンで免震重要棟から現場、現場から免震重要等へとピストン輸送で交代を行い、入れ替わり立ち代わり作業を行っていたので、自分がそのラインを作る作業に加わったかと言われるれば、記憶が曖昧である。
- その後、3号機前の逆洗弁ピットに溜まった海水を1号機に注水する準備を始めることとなったが、その前には自衛隊の消防車が到着していたと思う。

【1号機爆発後の状況】

- 3月12日15時36分に1号機が爆発した際、私は免震重要棟にいた。
- 爆発の際に、1号機付近の現場には福島第二から応援に来ていた南明興産の者がいたが、そのうち2名と東電の社員を病院に連れて行くこととなり、私は所長の指示で付き添うこととなった。
病院は、双葉町から山の方に入った川内村にある診療所であり、東電が搬送用のライトバンを用意したので、それに乗って診療所に行った。詳しい時間は覚えていないが、診療所には公衆電話があったので、「ご自由にお使いください。」と親切に置かれている小銭を使って、家に電話したのが23時過ぎだったと思う。
- その後、怪我人については別の車で福島第二へ、私は乗ってきた車で福島第一原発に戻った。
- 私が復帰して現場に行くと、南明興産の消防車に自衛隊の消防車2台を直列につないだ形で、逆洗弁ピットの海水をくみ取り、1号機への注水が続いていた。
- 日付が変わって3月13日となり、発電所の緊急対策本部では、これまで1号機に注水していたが、3号機にも注水しなければならないという話になったようである。
当初、現場の私達としては、1号機と同じように逆洗弁ピットから海水を注水する方向で動いていたが、いきなり緊急対策本部から、南明興産の無線機を通じて、「水が残っている防火水槽を探して真水を入れろ。」という指示が出て、3号機裏手の防火水槽から水を引っ張ってきて3号機に注水するラインを作ることとなった。
私たちは線量の関係もあり、交代で作業に当たっていたので、自分が直接そのラインを作る作業に当たったかどうかは記憶が定かではないが、真水を注入する指示が出たときに現場で「どこか他に使える防火水槽はないか。」という検討をしたことをよく覚えている。
- 3月13日の午前中に3号機に真水を注入し始めたが、防火水槽に残った水も底を尽き、結局、3号機前の逆洗弁ピットから海水を汲み上げて注水することとなった。
その後、周りが暗くなっていたので、夜のごとだと思うが、東電の社員と逆洗弁ピ

【取扱い嚴重注意】

ットの海水がなくなった場合、どこから海水を補給するかという検討をした。

東電の社員が、4号機の海側にある取水口という海水を汲み上げる場所から、消防車で揚水するよう指示してきたが、海面までの高さは20メートルくらいあり、

消防車のポンプ機能で20メートルの高さを汲み上げるのは無理であると思ったので、

無理です。

と答えた。すると、東電の社員が

いや、できる。

と強弁してきたので、無駄だとは思いながら指示に従ったところ、結局、揚水することはできなかった。

- そのまま逆洗弁ピットからの注水は続いたが、詳しい時間は覚えていないが深夜に逆洗弁ピットから海水が汲み上げられなくなり、注水が中断したので、東電の人から取水位置を調整

するよう指示を受け、ピット内の骨組みを避けるようにホースを入れていったところ、引き続き海水を汲み上げられるようになり、注水を再開することができた。

- その後、逆洗弁ピットの海水も尽きてしまったことから、私は直接作業に関わっていないが、

物揚場に置いた消防車により海面から直接海水を汲み上げ、消防車を繋いで逆洗弁ピットに海水を補給する

ラインを作った。

【3号機爆発後の状況】

- 3号機が爆発した3月14日11時1分には、私は1号機付近の現場にいたが、爆発後、東電の社員の人たち無事を確認し合った後、物揚場に配置してあった千葉火力の消防車の圧力を調整してから、徒歩で免震重要棟に戻ったところ、■■■■部長が「秋元、■■■■2名が行方不明。」と騒いでいた。

- その後、■■■■と千葉火力から来ている20代の男の子が怪我をして戻ってきて、そのまま福島第二原子力発電所の正門脇にある診療所に搬送されたが、15時くらいに所長から「■■■■を迎えに行ってくれ。」と言われたので、福島第二まで車で迎えに行った。

- 福島第一原発に戻ると、給油班のタンクローリーの運転手が帰ってしまったということであり、現場で活動している消防車への給油ができない状況となっていた。私はガソリンスタンドでアルバイトした経験くらいしかなかったが、東電側から「秋元さん、頼む」と言われ、「ここまでは私達の仕事ではない。」と強く思いながらも、一度だけというつもりで、現場に行きタンクローリーから給油を行った。

- その後、3月14日21時ころに、「また、行ってくれ。」という依頼があり、「では、やり方を教えます。」と言って東電の社員を連れて現場に行き、給油方法について指導を行った。

【取扱い厳重注意】

【退避以降の状況】

- 3月14日22時ころ、給油の指導を終えて免震重要棟に戻り、サーベイを終えて一息ついていると、南明興産の社員から「秋元さん、早く着替えろ。」と言われ、寄ってたかって服を着させられた。周りを見ると東電の社員もひしめいており、最低限の人員を残して退避することとなったことが雰囲気でも分かった。
しかし、1時間くらい経っても状況に何の変化もなく、沢山いた東電の社員もどこかへ散ってしまった。後になって分かったことだが、管総理が「現場を投げ出すとは何事だ。」と発言したことが伝わり、退避が無くなったのだと分かった。
- 地震発生以降、私も精一杯対応に努めてきたが、3号機爆発により戦意を喪失した感があり、そのまま免震重要棟1階で寝てしまった。朝、起きると東電の社員から6時ころ2号機が爆発したということを知り、2階に上がるように言われた。今度はさすがに退避ということになったようで、吉田所長以下偉い人や最低限の人員を残し、自力で福島第二原子力発電所まで行くこととなった。
- 私は、通勤に使っている車があったので、その車で福島第二原子力発電所まで行き、南明興産の社員でまとまって体育館のスペースで休憩していたところ、東電の社員から「4号機で火災が発生した。あなた達の仕事なんで戻ってください。」と言われた。その時、所長が「安全が確保できない。私の一存では決めかねるので本社に判断を仰がせて欲しい。」と申し入れた。本社への確認の結果、「行く必要はない。」とのことであったので、そのまま南明興産の社員は体育館に残った。
- 3月15日に福島第二原子力発電所に退避し、そこで17日16時30分ころまで過ごしたが、南明興産の柏崎防災センターから迎えのバスが来て所長以下応援部隊も含めて23名がバスに乗って柏崎に向かった。柏崎に着いたのが22時を回っていたと思うが、柏崎では食事や衣料品のほか、ホテルも用意してくれており、ホテルに入ったときには0時を回っていたと思う。
- 翌18日に、柏崎市内の病院にて診察、カウンセリングを昼前には終了したが、みんな金を持っていなかったため、会社からそれぞれの自宅に帰る経費を受け取り、新幹線で東京まで行き、各自京浜地区や千葉に帰った。

以上